

梨新植時におけるハイフミンハイブリッドG・固形肥料1号施用試験(平成25年度)

1. 試験目的: 日本梨新植時のハイフミンハイブリッドG・固形肥料1号の施用効果を確認する。

2. 試験内容

- 1) 設置場所 秋田県秋田市(土壌;砂丘未熟土)
 2) 試験期間 平成25年4月19日(植付時)~10月25日(最終調査日)

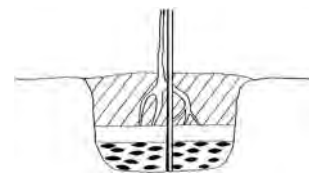


図1. 植え穴施用

- 3) 試験品種: 日本梨「秋泉」(1年生苗)
 4) 区の設定: 【新植時施用】 植え穴;直径130cm×深さ30cm への施用量

- ・試験区 ハイフミンハイブリッドG 1/3袋(5kg) + 固形肥料1号 約50個(4月19日植付、追肥無)
 植え穴に固形肥料1号を入れ、間土をして苗木を置き、資材を土と混和して埋め戻す(図1)。
- ・慣行区 発酵ケイフン 適量 + 他社有機入り化成肥料 適量(4月5日植付、追肥無)

4. 調査内容

生育調査は、5月8日、8月6日、10月25日に行った。
 試験区は5株、慣行区は2株を植付、幹直径・幹周りを測定した。測定は、苗木株元から高さ70cmの位置で行った。

5. 結果

表1. 幹径および幹周の測定結果(平均値)

	植付直後		夏場		秋	
	5月8日		8月6日		10月25日	
	幹径mm	幹周mm	幹径mm	幹周mm	幹径mm	幹周mm
試験区	11.7	39.2	13.9	44.8	14.9	47.8
慣行区	9.8	32.5	10.0	33.5	11.8	36.0

表2. 植付時から秋までの生育の違い

	幹径		幹周	
	幹径の差(mm)	指数	幹周の差(mm)	指数
試験区	3.2	160	8.6	246
慣行区	2.0	100	3.5	100

注) 1) 幹径、幹周の差は、(第4回目測定値) - (第1回目測定)の差。

2) 指数は、慣行区の平均値を100とした時の値。

6. 結果および考察

試験区では、植付時から秋までの生育が幹径で3.2mm増加した。慣行区と比較すると幹周の差が5mm以上になったことから、新植時の施用にはかなり有効であると思われる。特に果樹栽培の場合、新植した苗木をいかに早く成長させ、収穫することができるかがポイントなので、梨の新植におけるハイフミンハイブリッドG + 固形肥料1号の施用方法は苗木の生育促進に効果があると思われる。

7. 最終調査時の状況(10月25日)

試験区(ハイフミンハイブリッドG + 固形肥料1号)



慣行区



以上